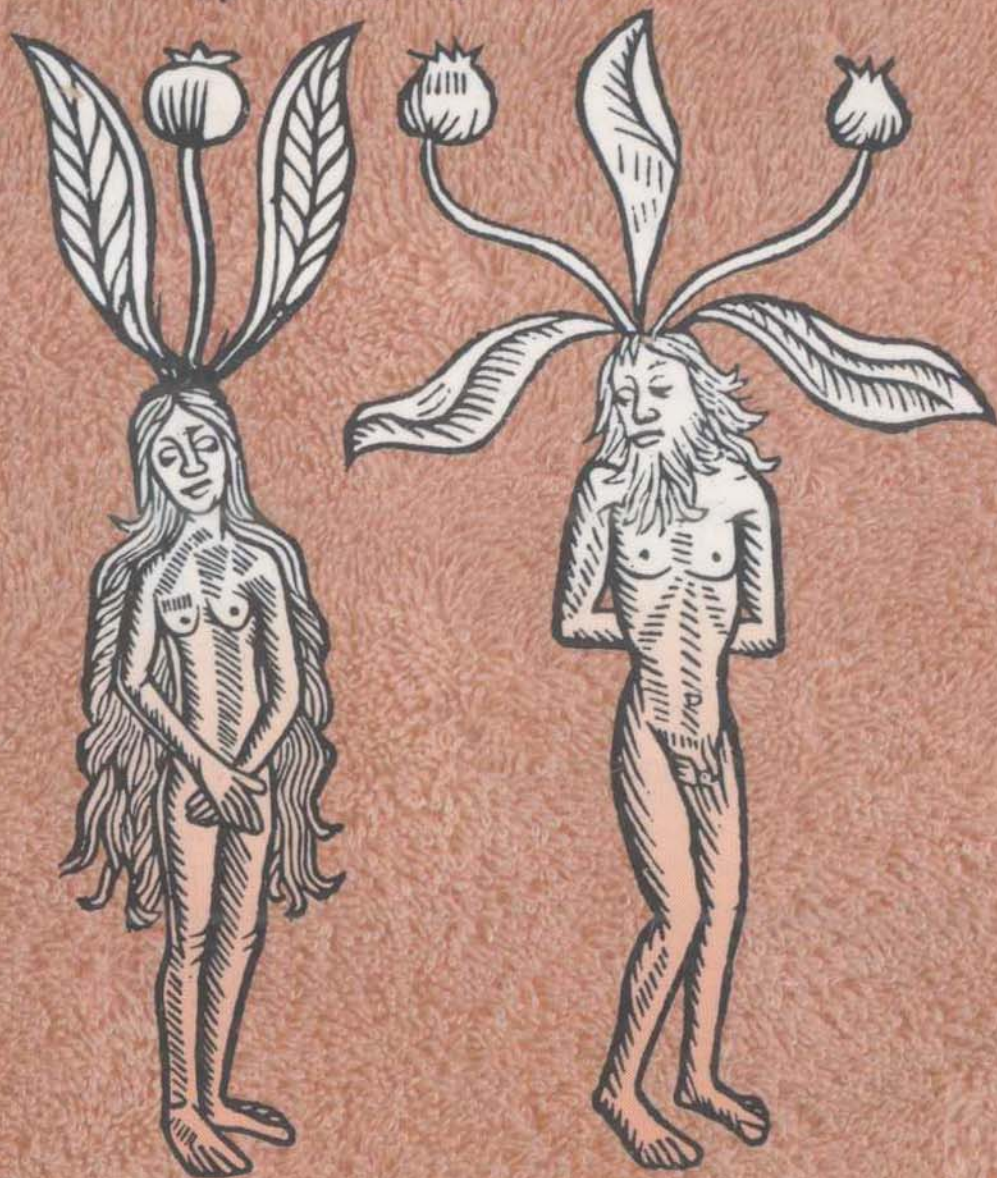


毒薬の手帖

澁澤龍彦



河出文庫

毒薬の手帖



著者 澁澤龍彦

昭和五十九年二月四日 初版発行
昭和六十二年九月三十日 八版発行

発行者 清水勝

発行所 河出書房新社

〒151 東京都渋谷区千駄ヶ谷二-32-11
☎〇三-四〇四-八六一一（編集）
〇三-四〇四-一二〇一（営業）
振替口座（東京）〇一〇八〇二

デザイン 栗津潔

印刷・製本 中央精版印刷株式会社

©1984 Printed in Japan

定価はカバーに表示してあります。

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

ISBN4-309-40063-9



kawade bunko

河出文庫

毒薬の手帖

澁澤龍彦



kawade bunko

河出書房新社

目 次

古代人は知っていた

血みどろのロオマ宮廷

マンドラゴラの幻想

ボルジア家の天才

聖バルテルミイの夜

ふしぎな解毒剤

ブランヴィリエ侯爵夫人

黒ミサと毒薬

毒草園から近代化学へ

砒素に関する学者の論争

さまざまな毒殺事件

巧妙な医者の犯罪

集団殺戮の時代

文庫版あとがき

毒薬の手帖

古代人は知っていた



第1図 龍を退治するギリシアの英雄

「毒」という言葉には、あらゆる犯罪者や、ロマンティックな犯罪文学愛好家を強く惹きつける、奇妙に魔術的な、眩惑的な響きがあるように思われる。

わたしが中学一年のころ、ある英語の先生が「韻をふむ」ということを説明し、その例として、オスカー・ワイルドの著作に『ペン、鉛筆、^{ペンシル}毒薬^{ポイズン}』という、Pではじまる一種の

頭韻法を用いた表題のエッセイがあることを教えてくれた。周知のように、このワイルドの評伝は、「緑色の研究」という副題をもち、その主人公には、繊細な芸術愛好家であると同時に怖るべき毒殺常習者であったウェインライトなる実在の人物をあつかっている。

ウェインライトは、美しい指環のなかにインド産の *nux vomica* と呼ぶ結晶体の毒薬をかくし持っていて、庭園と城館をほしさに叔父を殺したり、妻の母を殺したり、あるいは一万八千ポンドの保険金のために、義妹や養父を殺害したりするという、数々の犯罪を

犯した真正の毒殺魔であった。

むろん、少年のわたしは、まだワイルドの著作に親しんでいなかったとはいえ、英語の先生の口からふと洩らされた、この魔術的な響きをもつ「ペン、ペンシル、ポイズン」に、後年のわたしの趣味や傾向を決定するかに思われる、限りない夢想の種を汲み出していたことは事実である。

まあ、わたしの個人的な経験はともかくとしても、たしかに、毒という言葉は、古代から、魔術や妖術と密接な関係をもっていたらしい。女妖術使がヒヨスや、ペラドンナや、マンドラゴラや、トリカブトや、キンバイ草などといった植物を好んで用いたことはよく知られている。また、科学的な死因究明の方法がまだ確立されていなかった時代には、ある人物の不慮の死は、しばしば悪魔や妖術の実行に関係があるものとされ、妖術使と目された男や女が、不当にその死の責任を負わねばならない場合も多かった。

これは何も遠い昔に限ったことではない。人間精神のなかに棲みついた迷信の力が、いかに根づよいものであるかをまざまざと例証するような事件が、ごく最近にも起っているのである。一九五八年十月、北ドイツのある百姓が、その娘を毒殺したのであるが、犯行の動機は、「月足らずで生まれた娘は、やがて女妖術使になる」という迷信にあったそう
だ。……

毒殺者には女が多いといわれる。これも統計学的に動かしがたい真実である。有名なフランスのカトリック作家モーリアックの『テレーズ・デケイルウ』という小説のなかの、女主人公テレーズが、ホテルの一室で、ピンを取りあげ、青年の写真の心臓部にぶすりと孔をあけるのは、今も昔も変らぬ女性毒殺者特有の眩暈的な心理であり、毒殺という行為が往時の呪術の延長線上にあることを、端的に示しているものと言ってよからう。

リトレ大辞典によると、毒とは「皮膚から、呼吸から、または消化器から、動物の体内に導入され、器官の組織に対して有害な作用をおよぼし、生命をおびやかしたり、急激な死の原因となったりする物質の総称」である。

この定義には、もちろん議論の余地があるだろうし、科学的に正確なものとは言えない。ギリシアのディオスコリデスやロオマのプリニウス以来、各時代の毒物学者は、それぞれ自分なりに毒の定義をこころみているのである。

毒物投与の方法にも、各時代、各地方によって、さまざまな奇抜な流儀があった。指環の石のなかに粉末をかくし、油断を見すまして相手の飲物のなかに、ぱらぱらと粉末をこぼしたり、針の先に液体を付着させて、握手をするときに相手の皮膚をちくりと刺したり、敵の手がふれやすいカードや鍵に、あらかじめ毒を塗布しておいたりするといった巧緻な方法は、権謀術数を一種の芸術として見た無秩序なルネサンス時代には、ごく一般的なもの

のであった。

手袋や、長靴や、シャツや、書物にまで毒が滲み込まされていた。カルル五世の息子オーストリアのドン・ファンは、下着に滲み込まされた毒によって死んだと言われる。

蒸気による方法も行われた。アヴィニヨンの法王クレメンス七世は、松明たいまつから発散する砒素の蒸気を吸い込んで悶死した。

ドイツ皇帝ハインリヒ七世と、ルイ十三世の説教師であったベリユル枢機卿は、ふたりとも、ミサのとき、聖体パンに滲み込まされた毒によって、絶命した。これは珍しい例に思われるかもしれないが、さにあらず、名高いボルジア家の僭主やビザンチンの女帝たちは、こんな瀆聖的な手段を日常茶飯としていたのである。

毒はさらに灌腸器のなかにまで仕込まれた。ナポリ王コンラッドやルイ十三世は、この方法で殺されたらしい。彼らの直腸粘膜の襞に砒素が残っていた。サドの『悪徳の栄え』にも、灌腸マニアのナポリ王の話が出てくるが、これなんか、やはり歴史のエピソオドにヒントを得たものにちがいない。

十九世紀の毒物学者フランダンが伝えているところによれば、古代エジプトの王侯たちファラオンは敵への贈り物として、その体内に毒をふくんだ娘を差し向けるのだった。娘たちは永いあいだに少しずつ毒を飲まされるので、免疫性となっているからよいが、そんなことを知

らない相手がうっかり接吻でもすれば、いっぺんで死んでしまう。アレクサンドロス大王も、こんな風にして人工的に有毒性体質にされた美しい娘を、インドの太守から贈られたそうだ。

生殖器も、毒薬の伝達のための通路となった。ポエニ戦争で活躍したロオマの勇将カルプルニウスが、毒を塗った指先でクリトリスを愛撫して、その妻を何人も殺した話は有名である。また、法王インノセント十世の侍医であったイタリア人パオロ・ツァキアスの『法医学の諸問題』（アヴィニョン、一六六〇）によれば、ナポリ王ラディスラスは、敵の手によって「情婦の膺内にひそかに仕込まれた毒を、男根から吸収して」あえない最期をとげたという。

ヨーロッパ宮廷の歴史をざっと見渡しただけでも、このように奇怪な、猟奇的な、秘められた毒薬の使用法があったのである。

フランス薬物学界の長老ルネ・ファールブル教授の『毒物学研究序説』には、毒殺者の犯罪動機の種類が出ているが、興味ぶかいものだから次に引用しておこう。

家庭内のいさかい	四三%	復讐	九%
母親の手による幼児毒殺	二四	金銭上の欲望	九